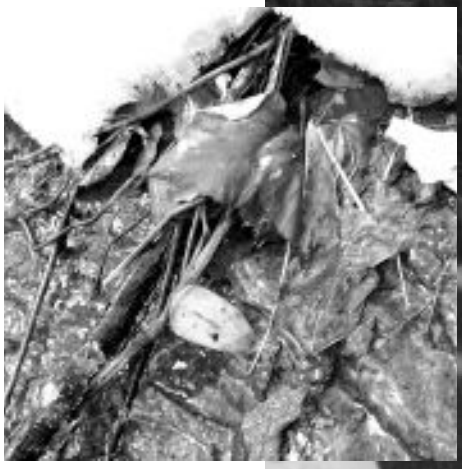
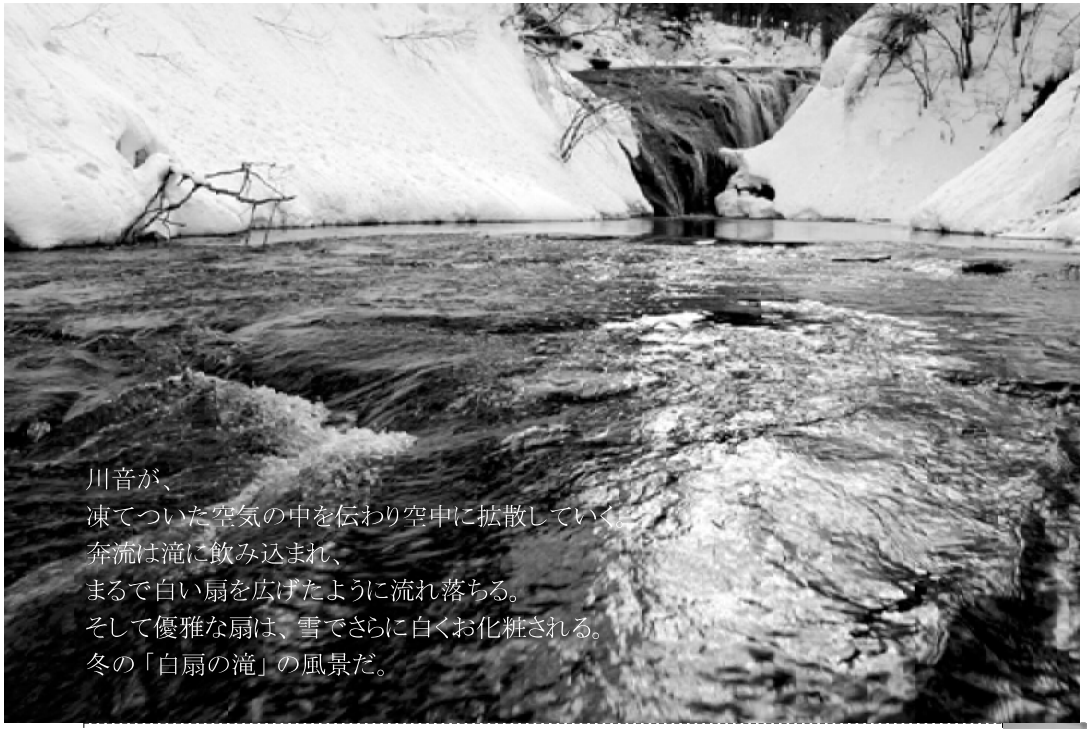


特集・アートな自然

盤尻

自然豊かなまち、恵庭を象徴する場所「盤尻」。
道路が開通し公園が整備されると、観光地へと変ぼうしました。
そんな「盤尻」も、深い雪に閉ざされるころになると、容易に人を寄せ付けない、かつての〝秘境〟の雰囲気がよみがえります。
今月は、普段、なかなか目にすることのできない「冬の盤尻」に、みなさんをご案内します。



川音が、
凍てついた空気の中を伝わり空中に拡散していく。
奔流は滝に飲み込まれ、
まるで白い扇を広げたように流れ落ちる。
そして優雅な扇は、雪でさらに白くお化粧される。
冬の「白扇の滝」の風景だ。

白扇の滝

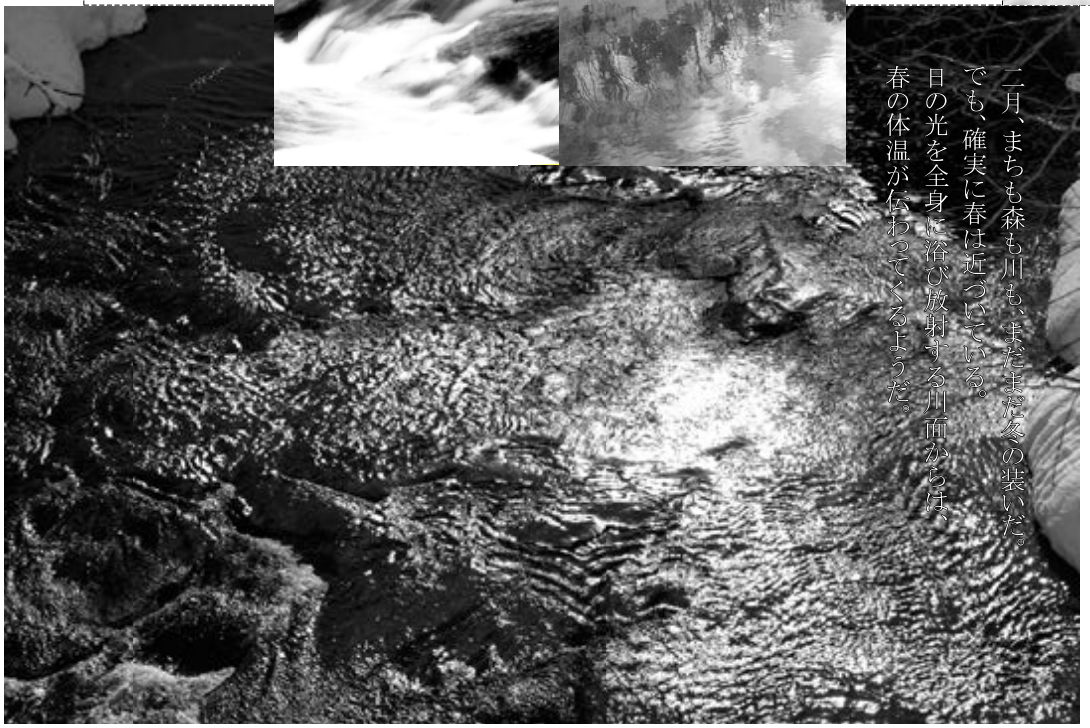
正面から「白扇の滝」を撮影すること、それが今回の〝盤尻探訪〟の目的の一つだ。滝の落ち口や横からは眺めることはできても、下から見上げることができない滝として「白扇の滝」は知られている。

〝川の水量が減る冬なら可能だと思う〟。以前ある人から聞いた、そんな話を根拠に「白扇の滝」行きを決めた。

雪が降り積もった急斜面を、冬山登山の経験豊富な人の手を借り、ロープで下ろしてもらい川に入る。果たして何人の人が、この川のこの場所に立ったことだろう。

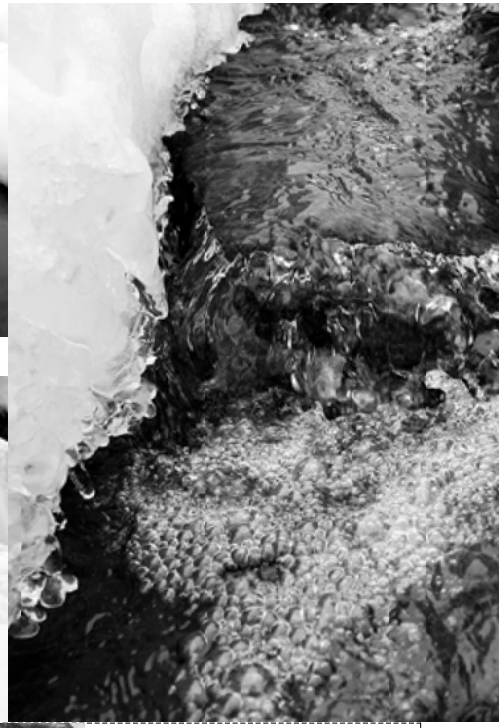
水深の浅い場所を選び、長靴で行ける限界まで滝に近づく。水量が少ないからだろうか、思い描いていたよりも小さな滝だ。見慣れたあの「白扇の滝」とは、ひと味違った表情を見せる。

冬、「白扇の滝」はつつましやかな姿に衣替えをする。

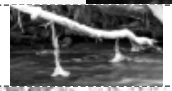


二月、まちも森も川も、まだまだ冬の装いだ。
でも、確実に春は近づいてくる。
日の光を全身に浴び放射する川面からは、
春の体温が伝わってくるようだ。

ちょっと寄り道して、
道道から少し奥まで歩いて行くだけで
こんな自然の息づかいに
出会える。



ラルマナイの滝

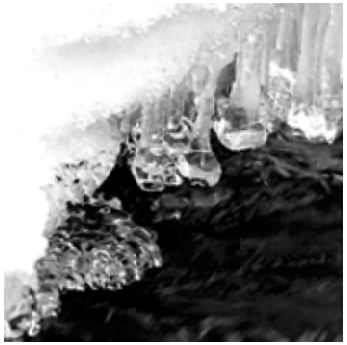


スノーシューを履き、散策路を歩く。
滝に架かる橋には、欄干の高さまで積雪がある。
突然こみ上げる“落ちる”という恐怖心。
そんな気持ちを横目に、我関せずと川は流れていく。

「盤尻探訪」２日目。この日は「ラルマナイの滝」と森林公園、およびその周辺を取材場所に決める。決死の覚悟（？）を必要とした「白扇の滝」の取材とはうって変わり、高低差が少ない分、比較的苦労せずに滝のそばまで行くことができる。

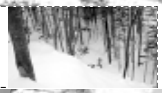
「ラルマナイの滝」は「白扇の滝」の下流８００ｍほどにある。このわずかな距離の間に水量は随分増しているように感じる。

川から顔をのぞかせた岩の上に、こんもりと雪が載った姿はどこかユーモラスだ。その一方で、厳しい寒さを表現するために「白扇の滝」に期待してかなわなかった、結氷した滝の片りんを、この「ラルマナイの滝」では発見できた。



〝トボ……、トボ……〟
命の気配が希薄な冬の森の中を歩いていると、
そんな言葉が口をついて出る。
オイ、誰もいないのか……。
キツネでもいい、返事をしてくれないか。

緑のふるさと森林公園とその周辺



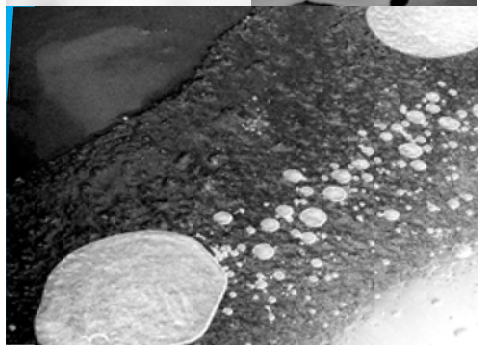
急斜面を、スノーシュー（西洋かんじき）を履き昇り始めると、すぐに息が上がってしまった。着いた先は「緑のふるさと森林公園」最上部。施設案内板で取材場所を決め森に入るが、積雪で遊歩道が確認できない。〝遭難〟という文字が頭をかすめる。で、周辺をウロウロ。小動物の姿を見たいと願ったが、残念なことに嫌われたようだ。

静かな森。聞こえてくるのは鳥の声、そして静寂の音――。

山を下り、漁川ダム下流部に向かう。緩やかな川の流れだ。ここまで下ると、上流域の秘境というイメージは、もはやない。

溶けはじめた川岸の氷が、一足早く春を告げている。

全身の筋肉疲労、そしていっぱいの写真を抱えて、さあ帰ろう。



広報編集者のスノーシュー体験記

「白扇の滝」の取材から始めた今月の特集。滝の正面に立ち、下から撮影するという目的を達成するため条件は、川に入ること。

ご存じのとおり「白扇の滝」周辺は急峻なガケ。ファミリーキャンプ程度のアウトドア経験しかない編集者たち。そこで、（石）君に相談した。

「僕がザイルで川まで下ろしてあげるよ」

（石）君は冬山にも登る。スキーだって、ゲレンデよりも山スキーを愛する男だ。彼がいなければ、今回の撮影は実現しなかったことは言うまでもない。

２日目からは編集部自力の取材。肝に銘じたことは決して危険な行動はとらないということ。当然である。

そこで活躍したのが「スノーシュー」。雪上を歩くための道具「かんじき」の一種なのだが、軽くて機能的で、しかも特別な技術は必要とせずに扱える。

とは言っても、雪上や斜面を歩き始めるとすぐに息が上がってしまった。日ごろの運動不足を後悔したが、時、すでに遅い。

でも、「スノーシュー」はいい！　使ってみての率直な感想である。

雪に阻まれている空間の少し先には素晴らしい世界が広がっている。そのことを、今回の取材を通して肌で感じることができた。

あえてそんな場所に行かなくても、とお思いの人もいるだろう。でも、静まりかえった空間に身を置いたときにわき上がってきた感情は、日常生活では得られない種類のものだ。これが取材でなければ、もっと楽しいゆったりとした時間を過ごせるのに、と残念に思う。

もう一度言おう、「スノーシュー」は楽しい。“慢性的運動不足編集者”イチ押しの冬の運動不足解消法だ！